

〈特別講演〉

## 腹腔鏡下手術と解剖学

—実践的な手術例から—

伊熊健一郎<sup>1</sup> 松本 貴<sup>1</sup> 安藤正明<sup>2</sup><sup>1</sup>健保連大阪中央病院婦人科 <sup>2</sup>倉敷成人病センター婦人科

“手術”と“解剖学”とは表裏一体であり、安全に手術を進めていく上には必要不可欠の密接な関係にあることを今になって再認識している。しかし、これまでの従来法である手術方法では、術者とスタッフがそれぞれに直視下に同じ手術視野を観察して手術を行うのであるが、実は術者の見る視点と他のものが見る視点とは残念ながら若干異なるものであり、そのずれの状態下に手術が行われている。ところが、1990年前後より登場したモニターテレビに映し出された画像の下に行う“内視鏡手術”は、術者と全く同じ内容の情報を他のスタッフにも共有し合うことを可能にしたのである。それにより、手術記録は当然のこと、リアルタイムに同じ情報の遠隔伝送が可能となり、またその情報下に行う遠隔手術も実現化され、全く新しい概念の手術法として医療界における診療革命をもたらしたのである。さらに、この内視鏡手術は、画像の拡大も自由自在に行えるため、従来法での拡大鏡を使う顕微手術も可能であり、進化した手術療法には益々“解剖学の必要性”が求められている。

本臨床解剖研究会においては、内視鏡手術である腹腔鏡下手術で対応してきた婦人科疾患の中で、特に解剖を要する手術内容を中心にビデオ供覧すると共に、基本的な解剖の理解と実際の臨床の場における実践的な解剖学の必要性について紹介したい。提供する手術内容は、①卵巣嚢腫摘出術の際での剥離層の認識と希釈ピトレスインの有用性、②子宮筋腫摘出術での回収方法、③子宮全摘出術の際での子宮動脈と尿管の確認方法、④子宮内膜症における各臓器の変位に対する解剖の必要性、⑤体験してきた幾つかのPit-fallからの反省点、⑥動物トレーニングによる手術手技の研鑽と確認、⑦婦人科悪性疾患に対する後腹膜下リンパ節郭清の実際、⑧その時に起きる血管損傷の対応、⑨遠隔指導による先天性膣欠損症に対する造膣術などを予定している。演者の所属する婦人科領域における腹腔鏡下手術の一端を提示することで、臨床解剖との益々の連携の必要性をみて頂き、今後の教育指導の上で何らかの参考になれば幸いと考えている。

## Craniocervical junction の静脈構造

—Multidetector-row CT および造影後

高速グラディエントエコー MRI による解剖学的検討—

田上秀一<sup>1</sup> 清末一路<sup>1</sup> 相良佳子<sup>1</sup>  
 柏木淳之<sup>1</sup> 森 宣<sup>1</sup> 堀 雄三<sup>2</sup>  
 近藤やよい<sup>2</sup> 岡原美香<sup>3</sup> 島田隆一<sup>3</sup>

<sup>1</sup>大分大学医学部腫瘍病態制御講座放射線医学<sup>2</sup>永富脳神経外科病院放射線科 <sup>3</sup>新別府病院放射線科

Craniocervical junction には主な静脈還流路である横・S 状静脈洞以外にも、condylar vein, suboccipital cavernous sinus, marginal sinus といった静脈構造が存在し、それらは basilar plexus, inferior petrosal sinus などの頭蓋内静脈とも吻合し後頭蓋窩の重要な静脈還流路を形成している。また craniocervical junction は腫瘍性病変や硬膜動静脈瘻の好発部位の一つであり、診断や治療を検討する上でそれらの解剖および variation を理解することは重要である。

今回われわれは MDCT および造影後高速グラディエントエコー MRI が施行された患者を retrospective に検討し、その解剖学的検討、特に normal variation に関して検討を行った。全例で頸静脈孔、舌下神経管、導出静脈孔とその内部を通過する jugular vein, condylar vein が描出された。Anterior condylar vein は全例で見られ、lateral および posterior condylar vein には左右差や無形成が見られた。また posterior condylar vein には anterior condylar confluence に合流する type と sigmoid sinus に直接合流する type が見られた。Marginal sinus にも大孔に沿って円形に形成されるものと部分的に形成されるものが見られた。Craniocervical junction の静脈構造には解剖学的な variation が存在し、その知識は頭蓋底病変の診断や治療の際に重要である。また MDCT および造影後高速グラディエントエコー MRI は craniocervical junction の静脈構造の評価に有用である。